

外国語教育における小中連携のあり方

～小学校での学びを中学校でいかすために～

M17EP006

清水貴美子

1. 目的と問題

(1) はじめに

文部科学省より平成 28 年 12 月に示された「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下中教審答申）によると、「グローバル化が急速に進展する中で，外国語によるコミュニケーション能力は，これまでのように一部の業種や職種だけでなく，生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され，その能力の向上が課題となっている。」(p.193) とし，これまで以上に，外国語を学習することの必要性が高まっていると言える．現行学習指導要領では，小学校外国語活動が 5，6 年生で週 1 時間，年間 35 時間ずつ行われている．平成 26 年度小学校外国語活動実施状況調査の結果[概要]によると，中学校外国語科担当教員の意識は，外国語活動を経験した中学 1 年生について，小学校で外国語活動を経験したことにより，「英語の音声に慣れ親しんでいる」に「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と答えた中学校教員は 93.5%でありその成果がうかがえる．また，同じ調査で，「英語で活動を行うことに慣れている」に 90.9%，「英語に対する抵抗感が少ない」に 86.2%，「英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されている」に 92.6%が，「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と答えている．

一方で，中教審答申では現行学習指導要領の課題を以下のようにまとめている．「指導改善による成果が認められるものの，学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生

じるといった状況や，学校種間の接続が十分とは言えず，進級や進学をした後に，それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができないといった状況も見られている．」(p.193)としており，学校間の接続が十分にできていないこと，学年が上がるにつれて生徒の英語に対する学習意欲が低下してしまうことや学習内容，指導方法が発展的にいかされていないという問題が指摘されている．次期学習指導要領では，小学校外国語活動が 3，4 年生で週 1 時間，年間 35 時間の授業が行われることになった．あわせて，5，6 年生では英語が外国語科として教科化され，週 2 時間，年間 70 時間の授業が行われることになった．小学校で外国語活動と外国語科の授業を受けてきた生徒がどのように変容するのか，先に見たような小学校外国語活動の成果以上のものが期待できると同時に課題点もみえてくるだろう．

(2) 課題意識

筆者も中学校現場で 1 年生を担当した際に，中学 1 年の初めての授業時に，中 2 レベルの文法を用いて，自分自身が行きたい国を“I want to go to Egypt.”と笑顔で生き生きと述べる姿に感心したことがある．小学校で英語に慣れ親しみ，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や物おじせず英語を話そうとする姿を通して，小学校外国語活動の成果を感じたことがある．

しかし，様々な研究会等で小学校と中学校の連携の取組の様子を多少把握していたものの，学区内の小学校との連携の取組が外国語教育においてほとんどなされていない現状を何とかしたいと感じていた．小学校の学びを

中学校でいかすことができれば、生徒にとっても教師にとってもよいはずだと思い、連携の取組を始めようと考えた。だが、筆者自身が外国語教育における小中連携のあり方について深く理解していなかったため、小中連携のあり方について調査し、何らかの連携策を見つけないと考えるようになった。そして、小学校の学びをいかす工夫を中学校教員として、意識して実践することができれば、生徒の学びが小学校から中学校へスムーズに移行することができる考えた。

（３）外国語教育における小中連携の現状

「平成 28 年度英語教育実施状況調査（中学校）結果の概要」の調査の設問項目から、文部科学省では小中連携を「情報交換」、「交流」、「カリキュラム連携」の 3 つに分類して考えていることがわかる。また、萬谷・直山・卯城・石塚・中村・中村（2014）は連携を以下のようにとらえている。「情報交換」とは、小学校でどのような外国語活動、外国語科学習を行っているのか、中学校の英語科でどのようなことを行っているのかお互いに知り合うことであり、具体的には、授業参観や合同研修会を指す。「交流」とは、児童、生徒、小学校教員、中学校英語担当教員の 4 者がかかわり合うことで、情報交換した内容を研究協議することである。具体的には、指導法等についての検討会、授業参観の研究協議、中学校教員による小学校での授業を指す。「カリキュラム連携」とは目標の一貫性、指導法の継続性、学習内容の継続性で、具体的には、小中の学びを見通した CAN-DO リストの作成、第二言語習得理論をいかした指導法を指す。（下線部筆者）これらの連携がどのくらい行われているのかが、同調査からわかる。小中連携に取り組んでいる中学校 77.7%，そのうち「情報交換」に取り組んでいる中学校は 68.4%，「交流」まで取り組んでいる中学校は 53.1%，「カリキュラム連携」に取り組んでいる中学校は 12.6%となっている。こ

の結果から、小中連携の取組としてお互いの授業を見合ったりすることは進んでいるが、授業研究会等を行い、指導法や教材等の連携は、半数あまりにとどまっていることがわかる。さらに、目標の一貫性や指導法の継続性、学習内容の継続性についての連携の取組が行われている中学校は、全体の 1 割強であり、ほとんどカリキュラム連携は進められていないことがわかる。また、「文部科学省平成 28 年度英語力調査結果（中学 3 年生）の速報」では、『『小学校で外国語活動が行われたことで貴校の外国語担当教員に変化は見られましたか』という問いに、小学校で外国語活動が行われたことで『小中連携に関する取組が一層促進された』と回答した教員の割合は、52.6%と最も高いが、『外国語活動を踏まえた指導の工夫がみられるようになった』と回答した教員の割合は 0.6%となっており、具体的な指導における連携は意識されていない状況が見られる」としている。これらのことから、小中連携における課題の 1 つにカリキュラム連携が進められていないという現状があることが分かった。現場では様々な理由から、カリキュラム連携が進まない難しさがあると推測される。

2. 研究の方法

カリキュラム連携の問題を改善するために次のような研究計画を立て、2 年計画で進めてきた。

○今年度

- ・実習校での参与観察
- ・文献調査、研修会、研究会等への参加
- ・小学校での学びをいかせる中学校での実践プログラム作成

○来年度

- ・中学校でのプログラムの実践
- ・プログラムの実践の検証

3. 結果

（１）実習校での参与観察

5 月から 12 月まで毎週木曜日、6 年生の外

国語科の授業を参与観察した。実習校は平成27年度より3年間、文部科学省より「外国語教育強化地域拠点事業」の指定を受け、町内3小学校、1中学校、1高等学校と連携しながら「グローバル社会を生き抜く自律的な学習者の育成～外国語教育を通したコミュニケーション能力の向上～」をテーマに研究を進めている。具体的には、小学校外国語教育を踏まえた中学校、高等学校における教育課程及び指導方法の開発である。その中で実習校では新学習指導要領の先行実施を見据えた単元や教材づくりや授業実践等が研究されていた。そして今年度の校内研究のテーマを「グローバル社会を生き抜く力を持つ子どもの育成～外国語活動・英語科を通してコミュニケーション能力を高める実践～」として研究が行われていた。5、6年では週2時間、年間70時間の外国語科の授業が実施されていた。

教材は文部科学省から新教材『We Can!』が発行されるまで、平成24年に出版された小学校外国語活動用の教材『Hi, friends!』、『Hi, friends! plus』を用いていた。指導態勢は、日本人教師2人と外国語指導助手(以下ALT)の3人で、基本的には日本人教師の一人は学級担任(以下HRT)であり、もう一人は英語専科教師(以下JTE)であった。指導方法は第二言語習得理論を意識したものであった。具体的には、チャンツを用いた音声インプット、インタラクションを通して表現の口頭練習をして慣れ親しむ。実際のコミュニケーションの場面を設定し、児童同士がやり取りをする。最終的に単元の集大成となるプロジェクト(アウトプットの機会と学ぶことへの動機づけ)を企画し、それを目標に、毎時間の授業の目標とその目標がクリアできるようなスモールステップが設定され、授業が組み立てられていた。実際にプロジェクトの一例として、「修学旅行で外国の人と話をして写真を撮って来よう!」、「ALTの兄弟とスカイプで会話してみよう!」、「授業参観にいらした外

国の人に自分のできることをアピールしよう!」などがあった。1時間の指導過程は、基本的に以下のように統一されていた。

1. あいさつ
2. ウォームアップ
3. アクティビティ(2～3つ)
4. ミラクルタイム(文字を学ぶ時間)
5. 振り返り
6. あいさつ

毎時間の授業計画については、6年のHRTとJTE及びALTとで放課後、その日に行った授業の反省をしながら、次時の授業について相談し、決めていた。学年として統一することを前提に、学級全体の授業の進捗状況や個々の児童の様子、学級の実態も考えながら計画していた。場面に適した表現を、まず英語で聞いて、内容を理解する。どんな表現なのか気づく。そして、その表現の口頭練習をして、言えるようにする。活動を通して場面が与えられ、表現を使ってコミュニケーションを図る。その過程を通して、児童が表現を理解し、使えるように指導していた。

以上のことから中学校で小中連携を意識した授業づくりを行う際に留意したいことを以下のようにまとめた。

○指導内容の連携

- ・小学校で学んだ表現と中学校で学ぶ文法事項をつなげたプログラム作成

○指導法の連携

- ・中学校での指導法の工夫…小学校で使われている活動の援用(チャンツ、歌、絵本、リスニング、インタラクション、スピーチ活動)
- ・小学校での学びの財産をいかした中学校での授業指導案の提案

○ALTとの協力

○教材の共有

○打ち合わせの時間の確保

○小中の学びを意識した CAN-DO リストの作成

(2) 文献調査

①新学習指導要領，中教審答申等

文部科学省（2017）中学校学習指導要領解説外国語編では、「文法はコミュニケーションを支えるものであり，コミュニケーションを円滑に行うとともに，内容を伴う豊かなコミュニケーションを図るためには，文法事項を正しく理解することが重要であることを当然の前提としているもの」（p.89）としている。これまでの中・高等学校の英語教育では，語彙や文法の知識がどれだけ定着されたかだけが問われ，それらを用いたコミュニケーション能力を育成する活動がなされていないことが問題となっている。これを改善する策として，小学校で得たコミュニケーション能力をいかし，中学校で文法を学び理解することで，より豊かなコミュニケーションが築けると考えられる。また，小学校外国語活動・外国語科に関わる多くのことを中学校側は理解し，円滑な接続に努めること，その上で外国語科で扱われた「文や文構造」を活用できるように指導することが重要であると書かれており，指導法や指導内容の接続が求められると言える。

②各種文献

2020 年より，外国語活動は 3，4 年で，5，6 年で外国語が教科となる。教科化されれば，なお一層小中連携の取組はなされるべきであり，図 1 のような小学校での学びと中学校での学びの違いを理解した上で，カリキュラム連携を図ることが重要になると言える。小学校で学んだ表現を中学校の文法事項へとつなげ，ルールとして学習した後，学んだ知識をいかした 4 技能 5 領域を取り入れた学習が必要である。生徒が学んで知っている文法や語彙を使ってアウトプットすることで，正しい言い方を学ぶ機会を得る。この過程を繰り返しながら，生徒は流暢さや正確性を高めてい

くことができると考えられる。

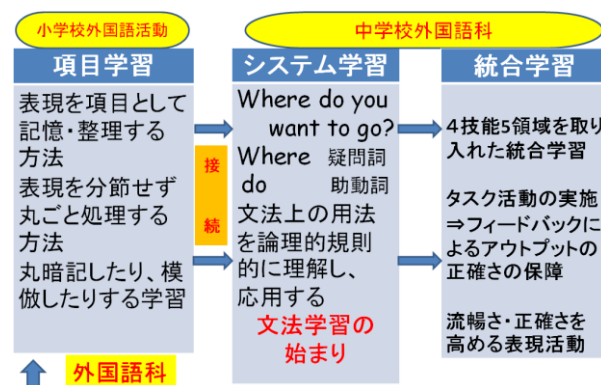


図 1 田中・眞崎・横山（2012）を参考に作成したもの

第二言語習得理論のうち，外国語活動や外国語科の指導に関係の深いものとして，インプット，インタラクション，アウトプットの重要性をあげている。インプットとは，学習者がコミュニケーションの場面で触れる言語のことであり，リスニング，リーディングを通して与えられる。インタラクションとは，学習者が参加する会話のことで，これを通して対話者からフィードバックを受け，正しい言い方を学ぶ。また，誤りに気付いてどのように直せばいいのかの仮説を立てる。アウトプットとは，その仮説が正しいかどうかを検証する機会である。それには①学習者が表現したいことと表現できないことの違いに気づく。②学習者が言いたいことや書きたいことをどう英語で表現するかを考える。③学習者がアウトプットすることで言語そのものについて深く考えられるようになる。④学習者が習った知識（音声・語彙・文法など）を活用することで知識を流暢に使えるようになるとされている。（酒井・滝沢・亘理，2017）。学習者が英語で受信することから学習をはじめ，発信する学習へと進めていくことが大切だと言える。

金谷（2009）は，文法指導のアプローチとして3つあげている。明示的文法指導，機械ドリル，コミュニケーション中心の文法指導である。明示的文法指導は賛否が分かれるものとしているが，言語習得への寄与として「正

しい用法と自己流の用法との違いに気づかせる効果があり、それが正しい言語形式や言語使用の習得を促すという説もある」としている。また、「文法解説によって得られた明示的文法知識は、その後の言語の『使用』を助けることがある。言語の使用とは言語を聞いたりと読んだりして理解すること、そして話したり書いたりして表現することである。明示的知識は言語の理解と表現の両面で助けになる可能性がある」としている。小学校で音のかたまりとして学び覚えてくる表現を、明示的に文法を説明し、ルールとして整理して学習することが大切だと言える。

ベネッセ教育総合研究所の「第1回中学校英語に関する基本調査（生徒調査）・速報版[2009年]」調査結果から、中学校での英語学習において、苦手意識やつまずきについてたずねられた中学2年生の約8割が「文法が難しい」とあげている。また、平成28年度英語力調査結果（中学3年生）の速報より、英語学習が好きではないと回答したA1（CEFR）下位レベルの生徒の多くが単語の綴りや文字を覚えることが難しい、文法が難しいと回答している。このことから、文法は生徒のつまずきになることを把握して指導することが大切であると言える。

文法を身に付けることで、正確に効率よく情報を伝えることができ、話者の態度や感情を伝えることができるとしている。また、その文法がどのような言語の使用場面でどのような形式で使われ、どのような意味を持つのかを教師が考えて、コミュニケーションに役立つ文法知識の育成を図るために下の四角の中のステップを踏んで文法指導ができるとされている（田中・田中，2014）。文法学習がコミュニケーションに大いに役に立つものであると生徒が実感できるような文法の指導を考えることが重要である。その際には、文法の規則だけでなく、インプットやアウトプットを伴う活動を行い、意味や形式の定着が図

れるよう工夫したい。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">①使用場面・働き・意味への気づきを促す導入②文法規則を理解し、文法の形式・意味・機能を理解し、特徴を捉えるための文法の説明③文法形式・意味・機能を結びつけるための口頭練習，形式的な練習④実際に言語使用を体験する活動 |
|--|

（3）各種研修会・研究会への参加

小学校外国語活動・外国語科の授業を参観し、研究会に参加することで、小学校外国語教育の理解を深め、小学校での学びを中学校にどういかしていけばよいのかを考える機会とした。特に放送大学小学校外国語教育教授基礎論受講と東京学芸大学公開講座受講を通して、小学校英語教育の理論について理解を深めることができた。同時に、中学校英語教育と比較しながら、学び方の違いや中学でも継続してける指導法、指導過程のあり方を模索することができた。その他にも、様々な小中学校の授業参観と研究会への参加を通して小学校英語教育の実際を見ることができた。

以上（1）から（3）より、まずは小学校と中学校の学びの違いを理解することが重要であるという思いを強く持った。また、小学校の学びを中学校でいかすために、中学校の文法事項を軸に、小学校で学んだ表現とつなげたい。文法は生徒が円滑に英語を使い、自分の考えや相手の考えなどを正確に理解するために必要な学習である。そしてその文法学習は中学生にとってつまずきとなりやすいことを教師が承知しながら、コミュニケーションの支えとなるような文法指導を組み込んだ単元計画を立て、文法デザインを用いて、文法学習の授業をパターン化し、苦手意識をなるべく少なくしたい。あわせて、単元を通して、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの4領域を意識しながら、文法事項をスパイラルに学べるよう教材を工夫し、指導していくことが重要である。指導の際には、小学

校での使用教材, 諸活動, 指導法を発展させ, 定着を図り, 自己表現活動へと学習を進め, 生徒の表現力を高める工夫をすることが必要不可欠であると考え.

(4) 教授内容における小中連携プログラムの構成

これまで述べてきたように, 実習校での参与観察, 文献調査から, ①小学校で学んだ表現を中学校で学ぶ文法事項へつないだプログラム一覧表, ②その一覧表から1つ文法事項を選び, その文法事項を指導する際の指導案を具体的に作成した.

①小学校で学んだ表現を中学校で学ぶ文法事項とつないだプログラム一覧表 (以下一覧表)

表1 一覧表 (一部抜粋)

表 現 (W)		中学校文、文構造、文法事項 (現行+新)	扱う 学年	到達目標	指導上留意するポイント
②U5	I went to~.	過去形 (不規則動詞)	1	過去形を用いて、中1の思い出を表現することができる。	不規則変化動詞は覚えてしまえるように工夫する
	I enjoyed~.	過去形 (規則動詞)	1	過去形を用いて、中1の思い出を表現することができる。	規則動詞のルールは理解しやすいが、定着まで時間がかかるので繰り返し学習する必要がある
	I enjoyed swimming.	動名詞	2	動名詞を用いて、何をすることが好きなのか、楽しいのかを表現することができる。	現在進行形と混同しないようにしたい

これまで現場で, 小学校から進学してきた中学1年生にとって文法を理解することは難しいことであり, ハードルとなっていて感じていた. ベネッセ教育総合研究所の「第1回中学校英語に関する基本調査 (生徒調査)・速報版 (2009年)」によると, 英語学習でつまづきやすいポイントの第1位は「文法が難しい」である. そのハードルをなるべく感じさせないために, 小学校で学んだ表現を中学校の文法事項へつなぎ, プログラムとした. 中学校では, 小学校で学んだ文脈をいかしながら, 表現として学んだことを文法学習でル

ールとして学ぶ. さらに文脈の中で表現する機会を与えることで, 一つの項目の定着の強化を図ることができるのではないかと考えた. 小学校で学んだ表現を中学校の文法事項へつなぎ, 到達目標を示し, 指導する際の留意点も示した. 指導する際の留意点は, 筆者自身のこれまでの現場での経験も踏まえ, 白畑知彦 (2015)「英語指導における効果的な誤り訂正 第二言語習得研究の見地から」(大修館書店)を参考に示した.

この一覧表を用いた小中連携を行った場合, 予想される成果としていくつか挙げられる. 1つ目に, 小学校で学ぶ表現と中学校の文法事項のつながりが一目でわかる. 2つ目に中学校での到達目標が明記されているので, 小学校での到達目標と比較ができる. 3つ目

に中学校側としては, 小学校での到達点から中学校での到達目標に向けてスモールステップの設定に役立つことがあげられる.

②一覧表を用いた指導案の提案

①で取り上げた過去形について具体的な内容を指導案で提示したい. 提示に当たっては指導法の継続, 教材の共有, 教授内容の共有にポイントを絞って指導案を作成した. また文法のデザインは田中・田中 (2012)の指導過程を基本に作成した.

外国語活動では過去形の扱いはなかったが, 新教材『We Can!②』では過去形を2つの単

元で扱っている。Unit.5「夏休みの思い出」、Unit.7「小学校生活・思い出」という単元である。その単元で学んだ単語、表現を用いて、中学校で行われる過去形の文法学習の指導案を提案する。

○導入

- ・小学校で使われている活動を用いる。
- ・ALT, JTE による音声インプット。
- ・小学校の過去形の学習で使われる語彙 (enjoy, see, eat, go) を用いる。

○説明

- ・ALT と JTE の会話で中学校レベルの過去形を用いた音声インプット。
- ・対話の原稿を配付し、話された内容を英語で読み、理解し、確認する。
- ・明示的に文法指導を行う。

○練習

- ・インタラクションと口頭練習を用いて ALT と JTE でやり取りし、そのやり取りからわかったことを口頭練習する。
- ・過去形の意味と形を記憶にとどめる。

○活動

- ・小学校で学んだ表現に中学校で学ぶ表現も含めて用いて、小学校での学びの際に使われた場面と類似している場面を設定する。中学1年の思い出を話す活動とする。
- ・話す活動で用いた表現を書きとる活動も仕組む。

教材の共有では、小学校で行われている活動やチャンツを取り入れ、これらの活動を通して、生徒が小学校で学んだことを思い出すことを意図している。教授内容の共有では、過去形の表現を文法事項で提示、教師とのやりとり、生徒同士のやり取りの時に、語彙と場面を共有できるようにした。指導法の継続では、インプット、インタラクション、アウトプットの順にリスニング、教師との会話、生徒同士のやり取り、わかったことを書くライティングを仕組むことで、話す活動から書く活動につなげている。

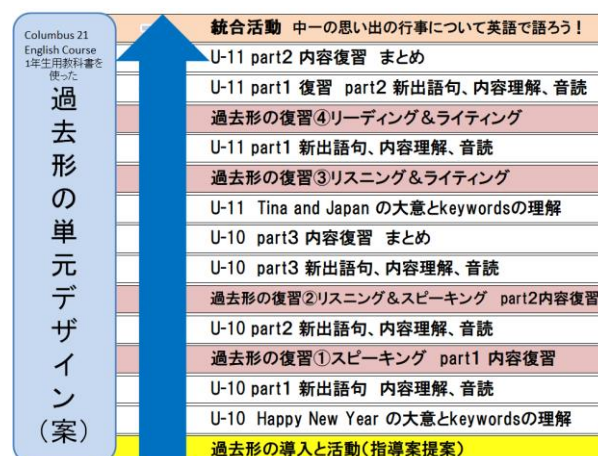


図2 過去形の単元デザイン例

実際に中学校現場では、文法事項の学習だけでなく、教科書の内容理解や新出語句の学習もあり、1つの単元でいくつかの文法を学習することもある。過去形を扱った単元は、肯定文、否定文、疑問文、規則動詞、不規則動詞を1つの単元で、あるいは2つの単元にわたって学ぶこともある。今回提案した指導案のような授業だけでなく、図2に示したように、1単元あるいは2単元を通しての過去形の復習を含めた授業を計画し、スパイラルに学びを深めていけるように、長いスパンでの計画・実践が必要である。いくつかの教科書では、最終的にアウトプット活動が過去形を扱った単元の終わりにプロジェクト学習として仕組まれている。「中学校1年の思い出」や「冬休みの思い出」のようなテーマで自己表現活動を仕組むことができる。小学校で学んだ過去形を同じ文脈あるいは類似した文脈で学び、文法学習を通してルールを学ぶ。タスクに取り組むことで文法の定着を図ることができる。最終的に統合活動を行い、それぞれの生徒が英語を用いて、より正確に流暢に表現できるようになったかを見取りたい。到達目標の達成状況をワークシートやスピーチを聞いて、ALTと評価したい。また、一覧表の指導上の留意点として明記したものが、小中のつながりのある英語学習をする上で、プラスになったのか、マイナスになったのか、

どちらでもなかったのか、生徒へのアンケート調査とテスト等を実施して見取りたい。

4. 全体の考察

本研究を進めていく中で、外国語教育における小中連携の重要性を再認識した。小学校の学びをいかすために、場面シラバスで学んだ表現を中学校で学ぶ文法事項へとつなぐことができた。一覧表は出発点であり、現場で活用することで、バージョンアップされるものであると考えている。中学校で始まる文法学習が生徒にとって苦手意識を持たせてしまうものの一つであることを再確認することができた。そして、小中のカリキュラム連携を意識し、生徒にとって学びやすい授業展開のあり方を模索した。その結果、教授内容、教材の共有、指導法の継続、小学校から中学校への段階的なレベルアップに留意して、指導案を作成し提案することができた。生徒の実態に応じて多少の変更は必要だが、中学校現場で小中連携の意識を持つこと、そしてカリキュラム連携の可能性を示すことができた。

5. おわりに

今年度小学校における外国語活動、外国語科の理解を深めるために、5月から12月まで小学校で実習をさせていただいた。おかげでこれからの外国語教育のあり方を想定し、小中連携の可能性を見つけることができた。本研究を進める中で、小学校と中学校の違いを小中の教員が理解することができれば、小中連携の可能性は広がると感じた。お互いに知っているようで知らないこともあり、そのことが、誤解を生んでいるように感じた。少なくとも筆者自身は、中学校との違いを体験しながら、小学校教育のあり方について理解できたことが多い。来年度は、中学校現場に戻るが、小学校と中学校の懸け橋のような役割を果たしていけるように努力したい。

6. 引用文献

ベネッセ教育総合研究所。(2009).『第1回中学校英語に関する基本調査(生徒調査)・速報版』。

<http://berd.benesse.jp/global/research/detail.php?id=3302>

金谷憲(2009).『英語授業ハンドブック中学校編』。p.208~248。大修館書店。

文部科学省。(H28.12).『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf

文部科学省。(2017).『中学校学習指導要領解説外国語編』。

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387018_10_1.pdf 文部科学省。

平成26年度『小学校外国語活動実施状況調査の結果[概要]』。

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/09/24/1362168_01.pdf

文部科学省。平成28年『英語教育実施状況調査(中学校)の結果概要』。

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/04/07/1384236_03.pdf

文部科学省。平成28年度『英語力調査結果(中学3年生)の速報』

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2017/03/02/1382798_1_1.pdf

酒井英樹・滝沢雄一・亙理陽一。(2017)。

『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ 小学校外国語内容論』。p.21~44。三省堂。

白畑知彦。(2015).『英語指導における効果的な誤り訂正—第二言語習得研究の見地から—』。大修館書店。

田中彰一・眞崎新・横山千晴。(2013).「小学校外国語活動と中学校英語科の接続(1)—現状と課題—」『佐賀大学教育実践研究』。第29号 p.25~40。

田中武夫・田中知聡。(2014).『英語教師のための文法指導デザイン』。p.4~51。大修館書店。

萬谷隆一・直山木綿子・卯城祐司・石塚博規・中村香恵子・中村典生。(2014).『改訂 小中連携Q&Aと実践 小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント』。p.6~7。開隆堂。